

信 毎 俳 壇

今井 聖 選

雨続く稲田に暮るるコンバイン	(飯山市) 伊東 寛和
豊年や天守ガイドの国詠り	(長野市) 萩原 宏祐
ひょつこの飛び出しさうな瓢かな	(箕輪町) 向山 政俊
手拭ひの簡単袋蟬捕り	(佐久穂町) 石田 弘子
病妻の軒に潜る虫の声	(松本市) 小林 幸平
二百十日はつと火の入る中華鍋	(安曇野市) 小坂るり子
葡萄園檻のいかに施錠せり	(須坂市) 佐藤 徳守
掌を秤に巨峰選ひけり	(飯綱町) 寺島 渉
撫子を抓むネイルの華色	(松本市) 伊藤 和夫
虫鳴くや明日抜く歯にフリン当つ	(佐久市) 西田 和彦
佳作 猫の尾に触れて弾ける鳳仙花	(安曇野市) 平 至行
デユフランティス神のいよ越ゆ秋夜のパー	(松本市) 辻 佳代

選 評

一句目、さまざまな農作業を一手にこなしてくれるコンバインが雨の稲田で働いている。機械への感謝も感じる。二句目、天守閣から稲一色の城下町を俯瞰している。ガイドの国なまりも豊年の喜びを演出しているようだ。三句目、瓢箪の口から魔法のようにひょつこが飛び出しそうな気がする。形がもたらす感覚。四句目、手拭いをひょいと袋の形にして蟬を入れる。手慣れたものである。

神野 紗希 選

天竜の風乾き稲架乾きけり	(伊那市) 中村 初治
伸び終へし草摺みある白露かな	(飯田市) 大石 昭重
どんぐりやよるはなみだがでてきちゃう	(中野市) 風間 一乃
秋涼しローズマリーの匂ふ風	(長野市) 富沢 信博
龍淵に潜む図書館自習室	(須坂市) 富田 孝弘
夜長の灯引き寄せアガサ・クリスティ	(長野市) 萩原 宏祐
蟬の鳴く湯治場に灯のひとり	(安曇野市) 加藤 文人
夕顔や月の涼しき夜を匂ふ	(下田市) 勝見 稔
老人に見える老木夏の空	(佐久市) 水間喜美子
ポップコーン山盛りにして子の月見	(佐久市) 佐藤 勝子
佳作 台風過案山子さかさきに突き刺さり	(佐久市) 竹内 勝代
掌にブルーベリーや子の笑顔	(長野市) 富沢 義親

選 評

一句目、天竜川から収穫を終えた田へ、風が吹きわたる。「乾き」を2回重ね、秋のさらりとした快さを広げた。稲架が乾けば脱穀、新米ももうすぐだ。二句目、夏を生い茂った草もその丈を定め、これ以上伸びない秋。露が降りれば、草もその重さで揺れている。衰えゆく季節を静かに見つめた。三句目、楽しく拾ったどんぐりの明るさが、夜のさみしさを際立たせる。大丈夫、また朝は来るから。

坊城 俊樹 選

成就せぬ恋多きかな蟬の声	(飯田市) 吉沢 奨
秋の声三面鏡のルーシユから	(下諏訪町) 中村 久
裏山に獣啼きたり露の夜	(小海町) 依田 久代
赤ん坊の大泣き湯屋に豊の秋	(長野市) 萩原 宏祐
饅頭の祝の判や敬老日	(長野市) 白鳥 寛山
橡の実で指の訓練でき父も	(佐久市) 竹内 勝代
昏れ泥む襪に虫の集さるる	(飯田市) 大石 昭重
体育が好きだったのよ敬老日	(須坂市) 丸山 葵子
ふじりんこ剥けばあかい匂ひせり	(佐久市) 町田ゆかり
枝豆のひよいと飛び出す若さかな	(佐久市) 市川小夜子
佳作 言ひ訳のつもりはないと月を見る	(長野市) 松本 博人
百舌鳥なくや彼は誰時のひとつ星	(佐久市) 赤岡 厚子

選 評

一句目、秋の虫の鳴き声はリリリと切ない。そんな声で果たして恋が成就するのであろうか。いくら大勢で鳴いてもほとんどが失恋するのである。二句目、これはミステリアスで美しい。鏡に映ったルーシユが何か囁く。それこそが「秋声」なのだ。どこか破綻する恋の予感も。三句目、こんなミステリアスな映画を見たような覚えがある。「獣」と言っておオカミを暗示するような措辞も恐ろしい。